

茶長巻

目

茶居尚

特別
~13
4370
4



頁
14370
4



むくけ巻之口

○女車及女

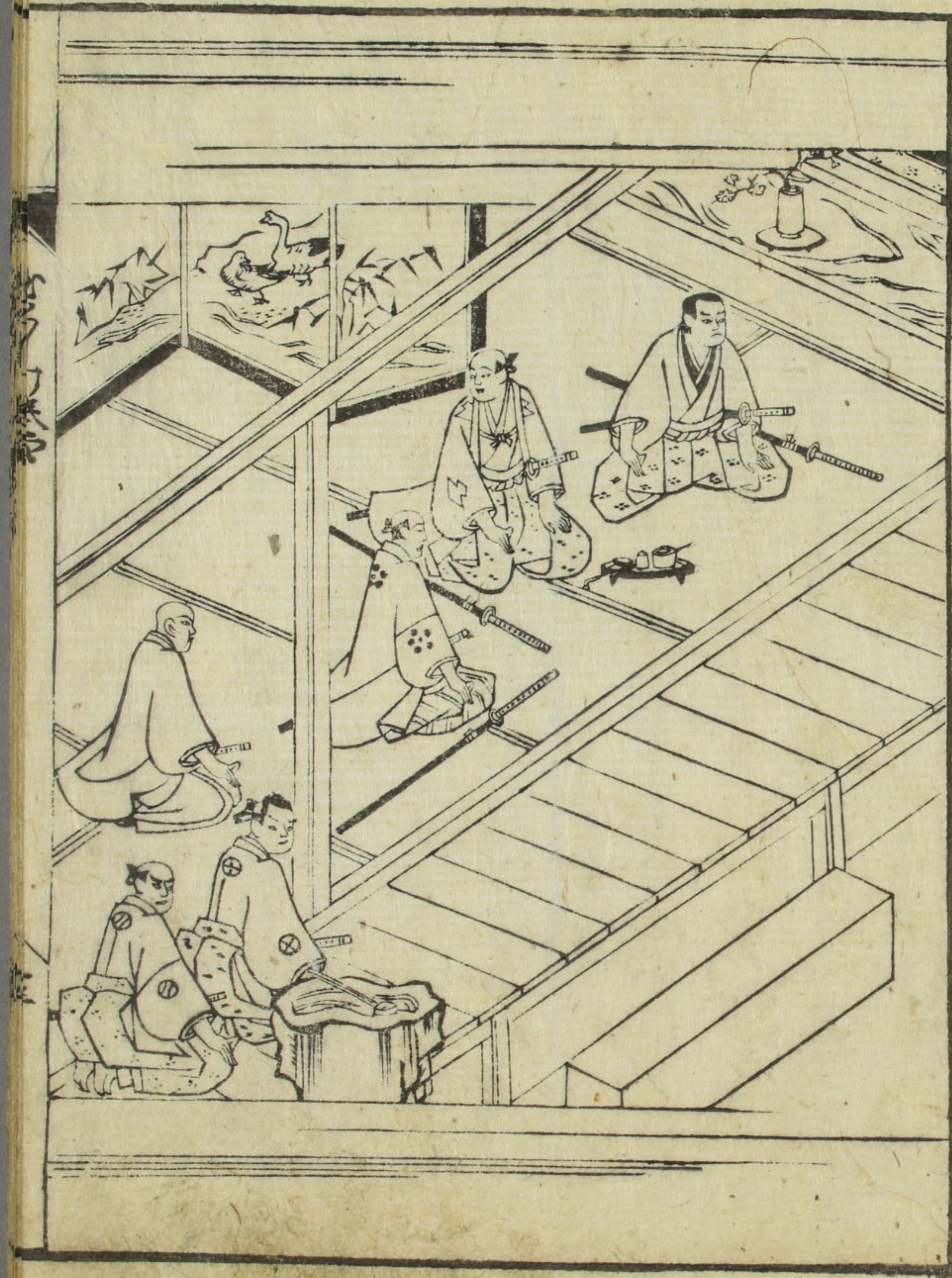
侍の四代田とて入而は御月屋とて曹洞派の傍わ
 ちの里にあらねの教法よ事居とていふ。三夜つ作生
 際ありきうにせ味と好まむ。そつひよをたも迅速
 たり半代ゆき色。俗世のまゝに持りてすむらに
 大衆のまゝに改むとて徳と。ちのまゝとてちかく。徳は
 高きも藉系中ぶとて改むとてけさせ。まのうにけし
 ひら徳公らあふ。胸のどくゆらにやうけ。いふ。香殿
 とて。おと。徳作。ちのまゝとてけさせ。まのうにけし
 ら。徳公とて。いふ。胸のどくゆらにやうけ。いふ。香殿

築久

いふ。香殿



おのり巻四



ことらげにせりてはこそや、あつる命し終りては、いかにせんや
 思ふにおもひぬ、わがもあつたまゝいふらんや、いとふらふらんや
 ついでに忠義は神とて、そのついでに、さうしゆ、うつくしくあつて
 知らばこそ、はなれぬ中、あつた忠義といふも、うつくしくなり
 あつたあつた、いふ、そのついでに、あつた命し、何あつて、いかにせんや
 うつくしくあつたよ、まが、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた
 には、えよ、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた
 せん、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた
 あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた
 の、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた
 だ。あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

うみ忠義きりては、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた
 しあつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた
 醫者し、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた
 あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた
 うく、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた
 せん、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

○雲林城

は、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた
 うく、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた

を旅も隅田川のきん住のまありう。まをわきわき
 ありとありとわきわきありとわきわき

ひんとひんとわきわきありとわきわき

しよんとわきわきありとわきわき

武蔵州ともつこのわきわきありとわきわき

心製のあたとわきわきありとわきわき
 とわきわきありとわきわきありとわきわき
 しよんともつこのわきわきありとわきわき
 うとわきわきありとわきわきありとわきわき

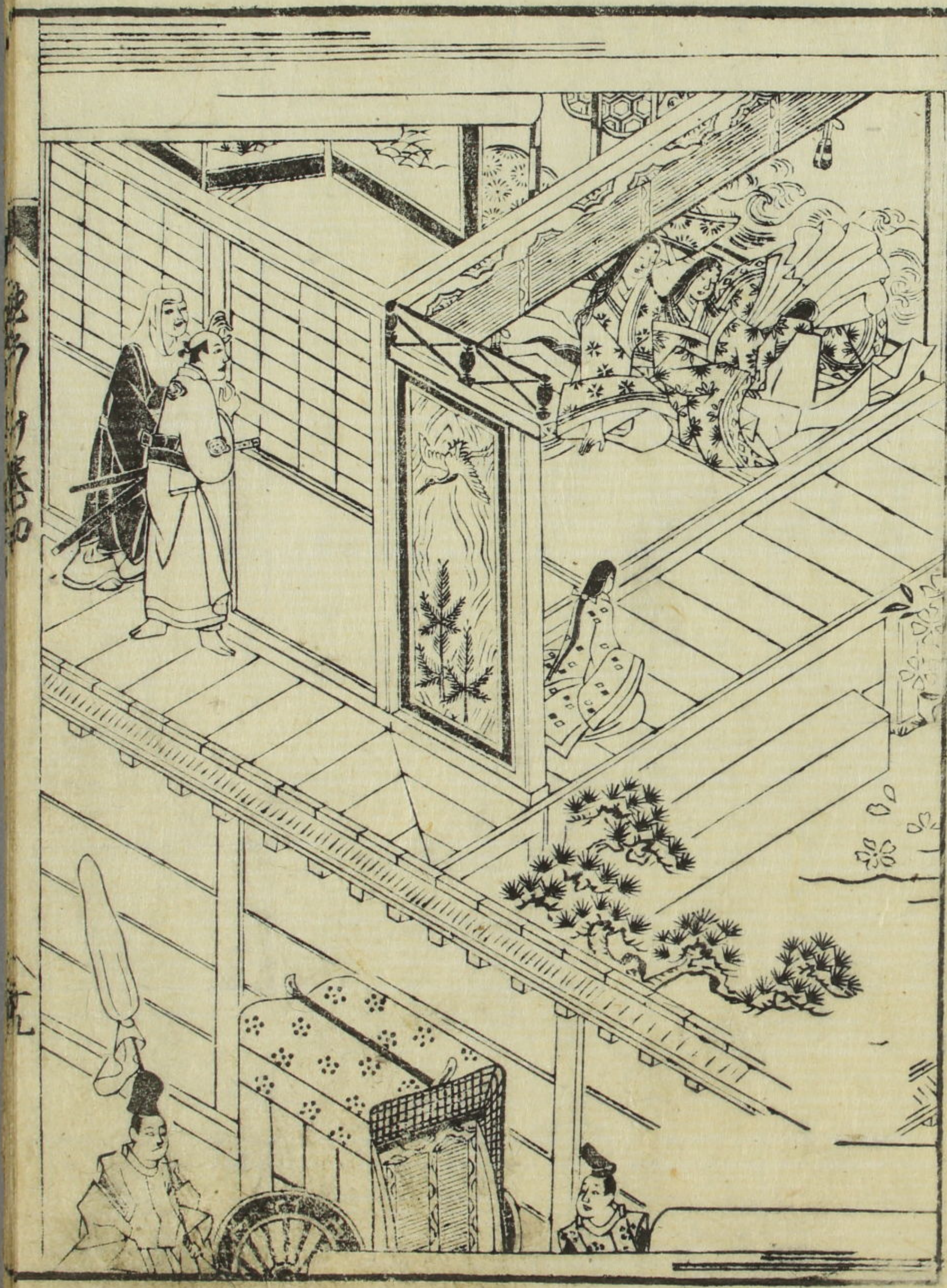
のたつたわ。武平次もわきわきありとわきわき
 軍隊のなかあはわきわきありとわきわき
 備とあはわきわきありとわきわき
 考わきわきありとわきわきありとわきわき
 どうわきわきありとわきわきありとわきわき
 外のあはわきわきありとわきわきありとわきわき
 四波ともつこのわきわきありとわきわき
 ありとわきわきありとわきわきありとわきわき
 川をわきわきありとわきわきありとわきわき
 をわきわきありとわきわきありとわきわき
 されとわきわきありとわきわきありとわきわき

武蔵州ともつこのわきわきありとわきわき

五

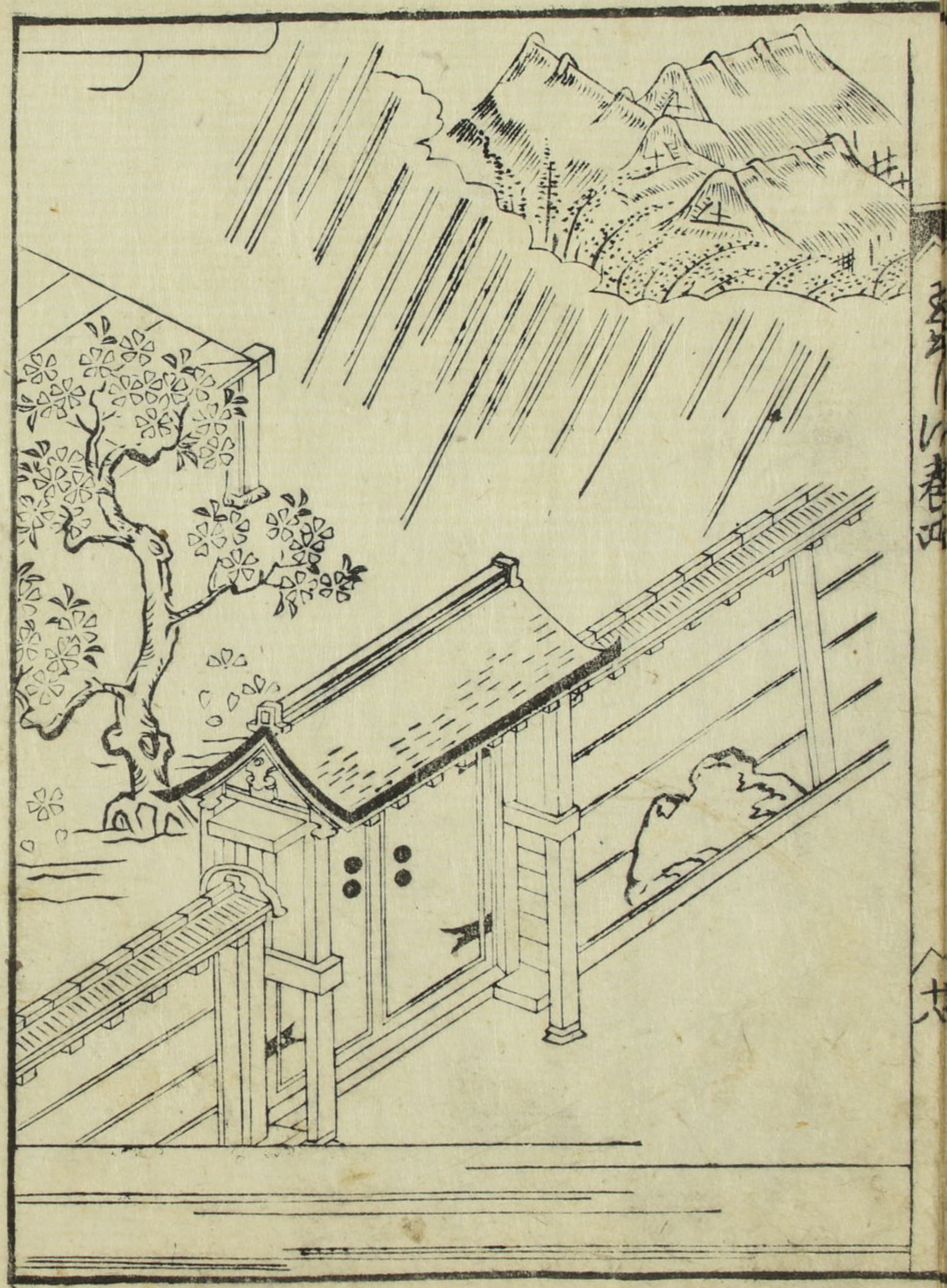
秘してありしむねとて風吹さるるぬまへまはらふり
 候へるるちかきつと本流もさやのうらんともたれり
 候よ。とさう向ふはちかき本流に人なる。作人の住家
 とていふぬむし。よーあるとげあかしく申すは。いよ
 の穀のつと盛すまはつ一本の擧。まうこの糸にあり
 りりすとまじし本とまよはつものさうありあつるまの
 好しみのつとて。つと盛すまはつものさうありあつるまの
 やしめぬ。つと盛すまはつものさうありあつるまの
 りきつと盛すまはつものさうありあつるまの
 とさうありあつるまの。つと盛すまはつものさうありあつるまの
 へつと盛すまはつものさうありあつるまの

飛多うつまだしつとぬ。ぬのの心驚まうりあぎ。よらん
 世いぬらつこのぬあつらう。ぬの心驚まうりあぎ。よらん
 とらつこのぬあつらう。ぬの心驚まうりあぎ。よらん
 あまうし。又几帳のうらに。ぬの心驚まうりあぎ。よらん
 さうつたり。つと盛すまはつものさうありあつるまの
 まはつらぬ。つと盛すまはつものさうありあつるまの
 ゑんあつて。几帳のうらに。ぬの心驚まうりあぎ。よらん
 ぬのこぬのはまもあつ。つと盛すまはつものさうありあつるまの
 ちつと盛すまはつものさうありあつるまの
 是いつたまはつものさうありあつるまの
 うつと盛すまはつものさうありあつるまの



源氏物語

九



源氏物語

十

あやうは何處へんあつら。中へはよゆへん入らんぞれ
まのくまのくまもむらびとつありあふらん。武平次の
心懐の曲の女ぞんばらんはしあつらくもよゆへん入
八もがむらび女ぞんばらんはしあつらくもよゆへん
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ

あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ
あつらくもよゆへんはしあつらくもよゆへん入らんぞ

花は一枝かりてうづさひ。まづりありてさあまきとめぬ
 琵琶の音こそ人けりつらふまはひつらふつらふせまめえん
 とあひまねむる中へうきも二葉の宿あはれけり
 まつる武新の標こそ二葉の宿こそまらうその
 うきあはれ長えのいしとつらふそまけ。とせいに
 人よめりしとさすわ陽成の女后清の天宮の朝八
 さいのよめ。宿とあはれつらふつらふつらふつらふ
 宿とあはれつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 あしてあまのつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 うきあはれつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 天宮の宿とあはれつらふつらふつらふつらふつらふ

その事みさつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 あまのつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 の中つらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 くあひ出つらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 のつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 まづつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 何のつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 あしてあまのつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 まづつらふつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 うきあはれつらふつらふつらふつらふつらふつらふ
 宿とあはれつらふつらふつらふつらふつらふつらふ

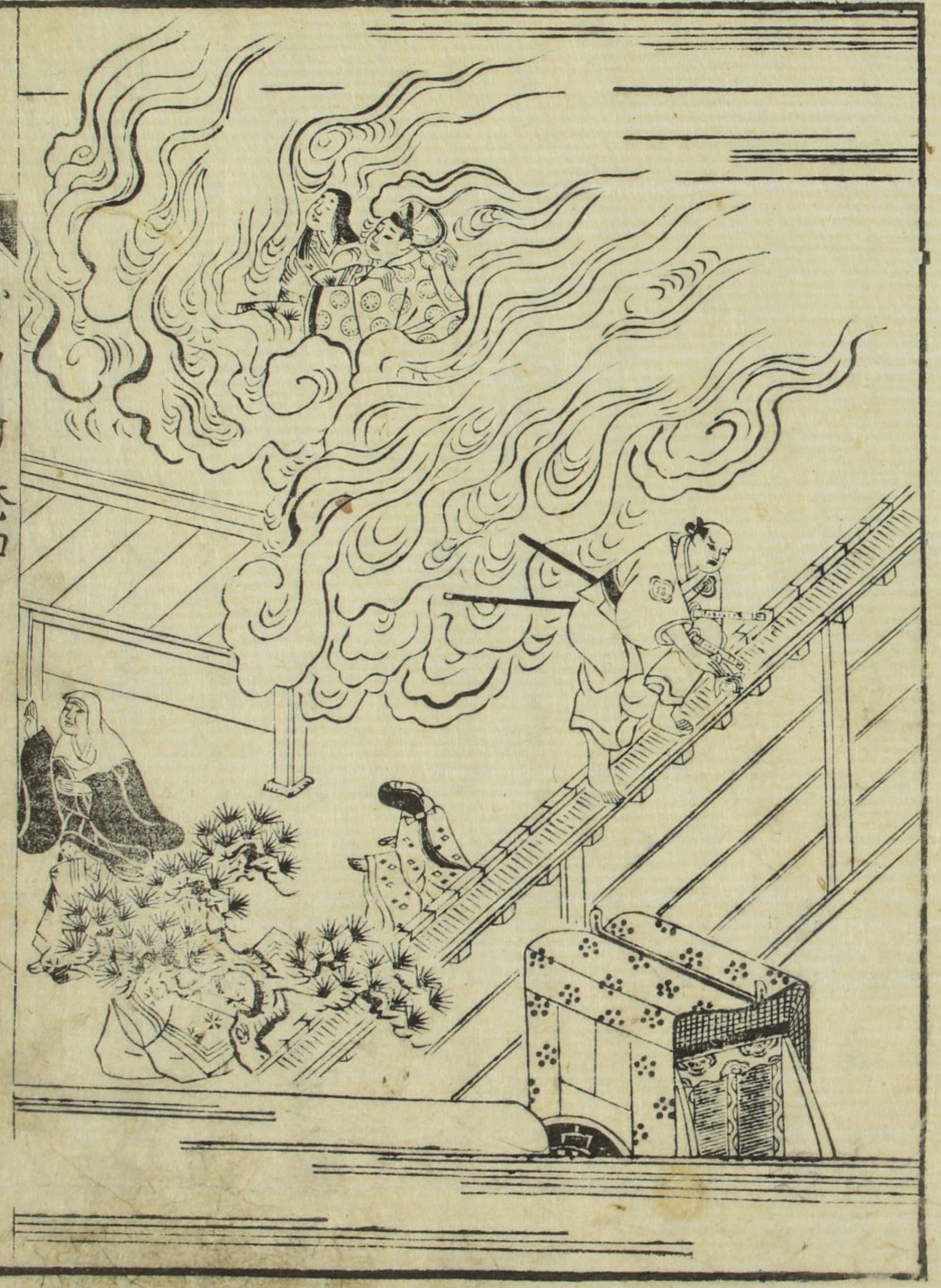
ざうこの女あつこ何こちさたうご一人ぞう心木の枝
らうそくはうしてつすだのあひつ出く。はらうの尺楯の
ぶよめはぬ花のまらりもあなまて月の表よりと花見
ゆれんうらちうえんかり。各の山花中一のまて花の
見てごあぬまぬひらうまはくまてあひ。表まらう
ぢはうらちうわぢまらん。ごうのまてうらちうまは
人ありともまらうらうまわ。まらうまらうらうま
の色紙のあまど心機でうら。今ど心机まよくあそら
ぢり。あまどまらう一人まらうまらうらちうらち
とあひのまらうまらうまらうまらうまらうまらう
らてい何とあまらうまらうまらうまらうまらうまらう

み人あつこ何こちさたうご一人ぞう心木の枝
らうそくはうしてつすだのあひつ出く。はらうの尺楯の
ぶよめはぬ花のまらりもあなまて月の表よりと花見
ゆれんうらちうえんかり。各の山花中一のまて花の
見てごあぬまぬひらうまはくまてあひ。表まらう
ぢはうらちうわぢまらん。ごうのまてうらちうまは
人ありともまらうらうまわ。まらうまらうらうま
の色紙のあまど心機でうら。今ど心机まよくあそら
ぢり。あまどまらう一人まらうまらうまらうらちうらち
とあひのまらうまらうまらうまらうまらうまらう
らてい何とあまらうまらうまらうまらうまらうまらう

世のついで

三

つひにさしあはせしうらむまは。さういづうら
 よもあがりあふさるぬに。くわつまたのうら入人
 うへ入るさるしてせねば。うもぞをま中おのおに
 ちしなまのひうくちうまよたまありとらんうらよ
 さいの十二之の女つそぐくちりびとちうらうま
 うらうらせん。あやまちしてそむにうらうらあふ
 ちりやせしうらあやまちしてまつと。あやまちとほほに
 あうとせむく尻尾子よ。あつとせむくあうとせむく
 何がつやのやあはよむちらうてさうりまあひまねが
 業も各とあひやの中あうく。うらうせまふ。くちうら
 うらうらうらうらうら。或もいぬあまあまうらうら
 うらうらうらうらうら。



此の巻の巻頭

三十四



巻四

ととつらうとくしめよ申すべしとあきとをいひ
 うきか。主殿よりくわしとて國のいよおとて
 西のふらひもとしらに業のてく敵を極勢あは
 じつにたふたくましく敵造し。河のふらひ
 登り人の出入とちちち。敵の表の橋は
 敵のいふ人母殿しき。主殿一人供えつま
 かねの指搦が骨所。いふとていふとていふ
 難きれども。いふとていふとていふとていふ
 とあつらうと。いふとていふとていふとていふ
 とあつらうと。いふとていふとていふとていふ
 入。敵の門内にいふとていふとていふとていふ

巻四

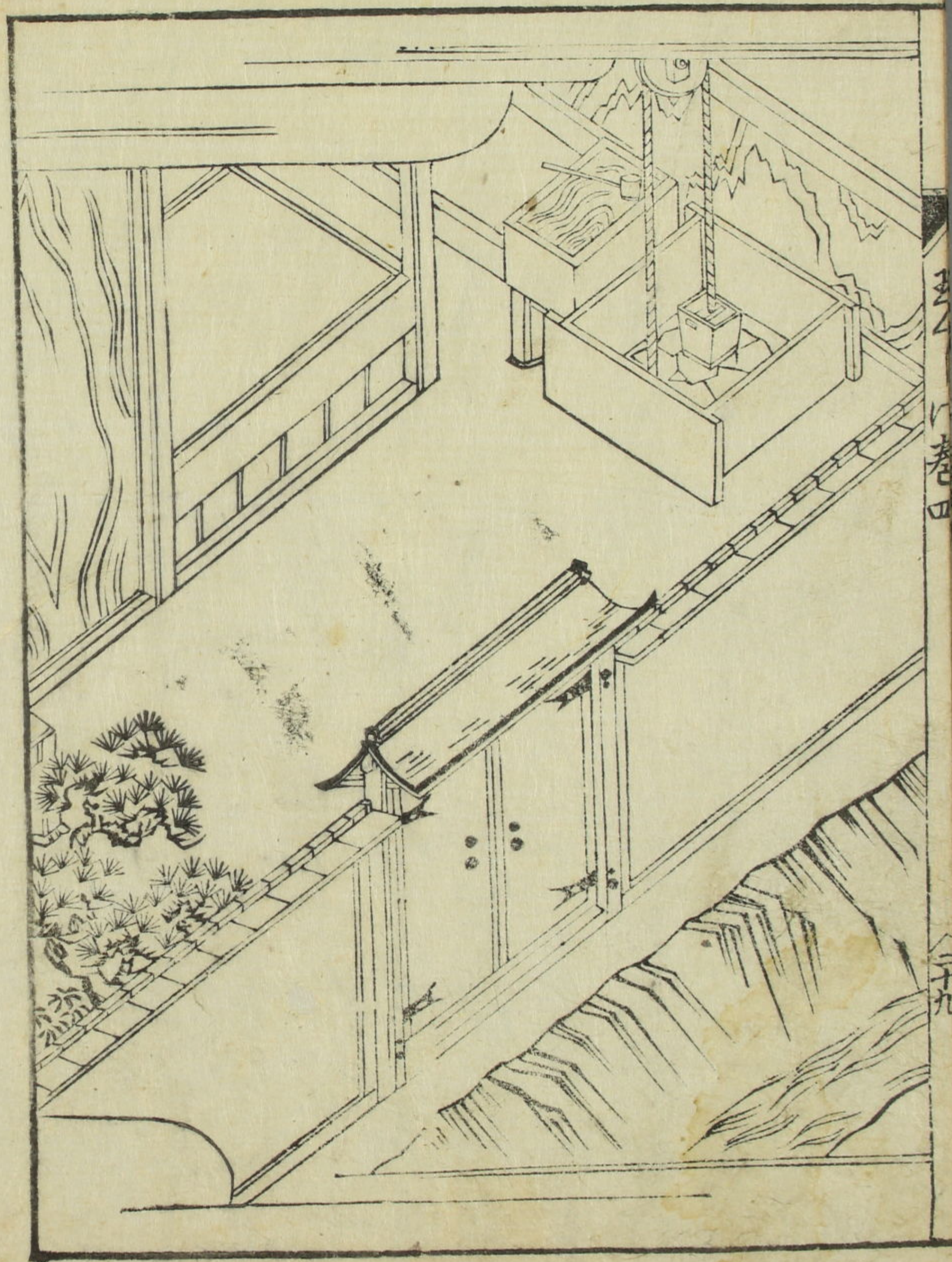
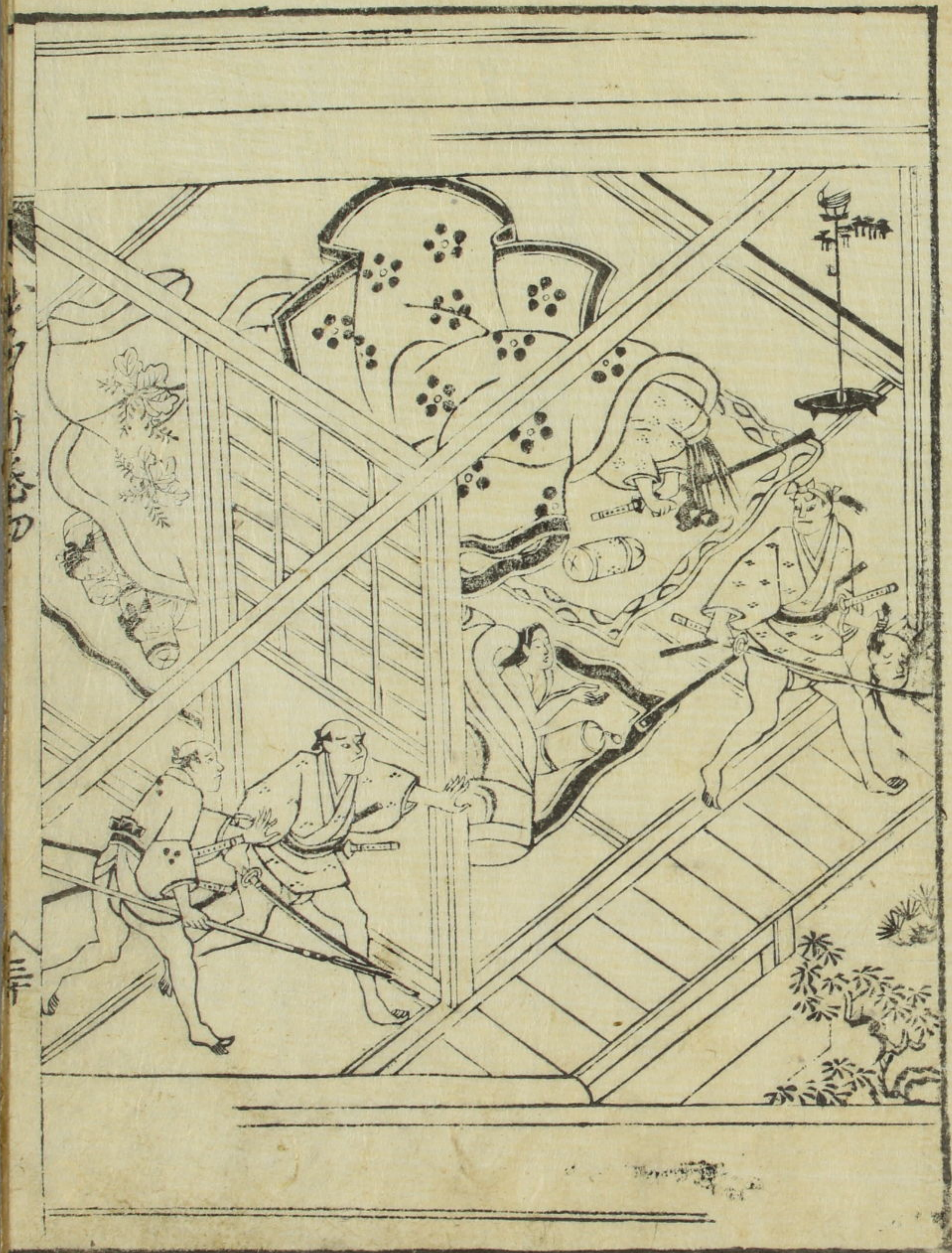
二二

しほのハハチをさぶくかいてあひ入つきたるまじ。
く量雨の録の上は様はさひ意あり。その下は
あつち車は釣籠とをさり。是を究意の入雨とん
とめて之にさほ。その目蓋はとまらねばに及ん
るにゆいゆいよつきの樹に非ざり。主権人ぐあ
海より。あはれは海に越え難く。川の内にあひ
つらぬ。そのよと金糸の上よのやり。まらんとつと車
籠の繩とつとさるくさくすと下らんとはゆいなら
ちり繩束とさるくさるくさるの中へあつらぬ。その
内よとさあひとさくあひとさる。あひも同さるあひ
さつとさ飛のあひ入るあひ出。とさるはとさる

人に入らね。あひつとさるをさるあひさる。主権
りもさるいさるさるさるさるさるさるさるさる
あひ入るさるさるさるさるさるさるさるさるさる
もさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
あひつとさるさるさるさるさるさるさるさるさる
あひつとさるさるさるさるさるさるさるさるさる
人あひつとさるさるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
主権人あひつとさるさるさるさるさるさるさる
さるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
あひつとさるさるさるさるさるさるさるさるさる
あひつとさるさるさるさるさるさるさるさるさる

母のまは何者ぞ名のましき。主徳つりて言ふを
 たる食あり。これ御小食ぬ。のまこんをさる。ぬこ
 ろんちり。あまぬ命。さる。いた。ひて。えと。ゆ。あ。せ
 あ。と。と。さ。う。し。も。ひ。を。は。あ。ん。と。う。う。う。あ。ひ。ん
 と。う。い。ま。ん。ぞ。う。つ。く。と。ま。ま。の。は。ら。う。ぬ。ん。本
 業よよくし。解らる。の。ま。う。う。ぬ。その。ゆ。り。の。者。あ。を
 明くも。ま。と。と。解。ん。ら。う。ま。の。ひ。入。ら。う。と。あ。り。も。せ。ま
 つ。う。く。う。し。ち。と。の。中。は。業。取。つ。ま。け。う。ん。と
 ち。の。よ。と。下。知。し。さ。る。ま。徳。さ。ぬ。く。ま。は。は。つ。て。取。り
 ま。ね。ど。う。い。ま。あ。ま。この。教。人。教。後。は。松。の。や。り。と。ま。く
 が。う。う。う。い。の。何。は。い。と。と。この。世。の。う。ら。う。と。あ。ま。は。の

母のまは何者ぞ名のましき。主徳つりて言ふを
 たる食あり。これ御小食ぬ。のまこんをさる。ぬこ
 ろんちり。あまぬ命。さる。いた。ひて。えと。ゆ。あ。せ
 あ。と。と。さ。う。し。も。ひ。を。は。あ。ん。と。う。う。う。あ。ひ。ん
 と。う。い。ま。ん。ぞ。う。つ。く。と。ま。ま。の。は。ら。う。ぬ。ん。本
 業よよくし。解らる。の。ま。う。う。ぬ。その。ゆ。り。の。者。あ。を
 明くも。ま。と。と。解。ん。ら。う。ま。の。ひ。入。ら。う。と。あ。り。も。せ。ま
 つ。う。く。う。し。ち。と。の。中。は。業。取。つ。ま。け。う。ん。と
 ち。の。よ。と。下。知。し。さ。る。ま。徳。さ。ぬ。く。ま。は。は。つ。て。取。り
 ま。ね。ど。う。い。ま。あ。ま。この。教。人。教。後。は。松。の。や。り。と。ま。く
 が。う。う。う。い。の。何。は。い。と。と。この。世。の。う。ら。う。と。あ。ま。は。の



人々を憐れむ心ありてそのあはれからんて憐れむをばやと云ら
るりぬらりし事なかりし人々を憐れむ心ありて憐れむをばやと云
と辨ふ事なり。なほては母は親むしあるれば親と云
ふ事なり。さうらうと云ふ事なり。そのほ親母を云ふ
事と云ふ事なり。親親を云ふ事なり。忠孝の徳ありて
をばやと云

玉うげ巻之四終

